ジェフリ・チョーサー作
トゥローイラスとクリセイデ（その八）

宮田武志訳

見ていても息が絶えそうになるほど、ひどく悲しみながら、クリセイデは振り向いて答えました、

「ああ、どんなお言伝(ことづて)なんですの？　もう二度とお逢いできそうにもないあの方が、わたしに何を仰有るお積りなのでしょう？　八六〇わたしが発つ前に歎きたい、悲しみたいってお積りなのかしら？　沢山ですわ、そんなお言伝なら。」

クリセイデの顔は見るからにまさしく棺台に乗せられた人のようです。天人の姿さながらでありましたのに、その顔はすっかり別人のように変ってしまい、何時も彼女に見られたはしゃぎ顔も、笑いも喜びもすべて消え失せて、今やクリセイデはただ一人で身を伏せています。両方の眼のまわりには、紛れ八七〇もなく苦悶のあらわれの紫色の輪ができて、見るからに息がつまりそうです。その様子を眺めて、パンダラスは両眼から涙が流れるのを禁じ得なかったのですが、必死になってトゥローイラスの言葉をクリセイデに伝えました、

「ねえ、クリセイデ、お前も聞いたに相違ないんだが、王様は貴族の方たちと一緒に、最上の策としてお極めになったんだ、これはお前の悲しみと不安の原因なんだが、アンティーナーさんとお前との交換の件をね。だけど八八〇、この事件のためにトゥローイラスさんは、実に言語に絶するほどお悩みになってるんだよ。まさにそのお悲しみのために、全く狂乱のご様子なんだ。あの方もぼくも、悲しみのあまり殆んど死んだも同然の有様になってしまったんだよ。だが、やっと今日、ぼくの忠告によって、あの方のお悲しみも幾分薄らいで来て、もし何等かの打開策があるなら、一晩中お前とそのことについて相談してみたいって、進んでそう望んでらっしゃるご様子なんだ。ぼくの了解するかぎりでは、これが八九〇お言伝の趣旨なんだよ、簡単明瞭に言えばね。だって、この際長ったらしい前置きから始めたって、心に留めてもらえそうにもないからね、気

が狂いそうに悩んでいるお前にさ。ところで、あの方にこのご返事をしてもらいたいんだよ。ねえ、クリセイデ、トゥローイラスさんがここに見える前に、是非とも泣き止まなくちゃ。

「わたし、とても悲しいんですの。」そう言って、クリセイデははげしく溜息をつきましたが、命も絶えんばかりに、ひどく思い悩んでいる様子です。

「だけど、[九〇〇]恐らく、あの方がご自身をお愛しになってる以上にあの方をお愛ししているわたしにとって、あの方のお悲しみは、わたし自身の悲しみよりもっと辛いですわ。ああ、あの方はわたしの為にこんなに悲しんで下さるかしら？　わたしの為にこれほど切なくお歎きになれるでしょうか、あの方に？　あの方のお悲しみを考えれば、わたし倍も悲しくなりますわ、全く。わたしにとって、お別れも確かに辛いことですけれど、あの方のお悲しみになるのを見るのは、もっと辛いことですわ。それが原因になって、わたし、きっと死ぬだろうと思いますわ。でも、お越しいただくようにあの方に仰有って下さいましな、こんなにわたしを脅かす死が、胸[九一〇]の中でおののいているわたしの心を追い出さないうちにね。」

このように言い終るや、クリセイデは両腕の上にうつ伏せになって、いとも切なげに泣きはじめましたが、パンダラスが言いますには、

「ああ、そんなことじゃ困るね、今にもあの方が見えるだろうってことは、お前にもよく分ってるじゃないか。さあ、大急ぎで立ち上ってさ、こんなに泣いてるところをあの方に見られないようにしなくちゃ、まさか、あの方が狂乱状態におなりになるのを望むんだってわけでもあるまいしね。だって、あの方がお前のこんなところをご覧になれば、自殺しようとなさるかも知れないよ。[九二〇]そんな事態になることが分っているなら、プライアム王からいくら財宝を分けていただいたって、ぼくはあの方をここにお連れしたくないね、だって、あの方がすぐさまどんな決心をしようとなさるかってことが、ぼくにはよく分ってるんだ。だから言うんだよ、悲しむことはよしなさいってさ。でないと、あの方は一も二もなく死んでおしまいになるよ。ねえ、クリセイデ、あの方のお悲しみを和げることを考えるんだ、あの方をますますお悲しませしたりしちゃ駄目だよ。あの方のお心を傷つける原因たらんよりは癒やす原因たれ、そうお願いするんだ。智慧を絞ってあの方のお悲しみを和げて差し上げるんだよ。町を水浸しにするほど涙を流してみたって、[九三〇]あの方と二人で塩からい涙に溺れてみたって、そんなことは何の役にも立たないじゃないか。歎く暇があるなら心を癒やすことだよ。

ぼくはこう考えるんだ、つまり、ぼくがあの方をここにお連れして来ればだね、あの方も賢明なんだし、また、考えもぴったり一致してるん

だから、お前のギリシャ行きに水をさすことを計画してもらいたいってことなんだよ。また、よし一旦あちらに行っても、すぐ帰って来られるように工作してもらいたいんだ。女ってものは当意即妙な術を心得てるんだから、お前の機転がこの際どれくらい効を奏するか見せてもらいたいね、お役に立つことなら、ぼくも抜かりなくやるがね。」

クリセイデは答えました、

「じゃあ、いらして、トゥローイラス様のところへ。叔父様[九四〇]、わたし本当に全力を尽くしますわ、あの方のご覧になってるところで泣かないようにね。それから、あの方をお喜ばせするように一生懸命努めますわ、あらゆる方法を考えてみますわ。このような悲しみを癒やす術が見つかるものなら、わたしの場合にだって、きっと見つかる筈ですわ。」

パンダラスはそこを立ち去ってトゥローイラスを探しましたところ、命などどうなっても構わないというような様子で、ある神社の中にただ一人でいるのが見つかりました。この世からすぐさま去らしめ給えと、慈悲深い神々に切に[九五〇]祈りながら、呻吟していたのでした、それ以外の恩寵は受け得ないものと確信していたのです。これを要するに、実際彼はその日全く絶望に陥って、命を絶とうとかたく決意したのでした、といいますのは、悲しいかな、もう全く駄目なんだ、ぼくは、何時もこう自問自答していたからです。[九六〇]彼の論ずるところはこうなんです、

「すべての出来事は起るべくして起るのだ、このように破滅するのがぼくの運命なんだ、だってぼくは、こういうことを知ってるんだ、つまり、疑うべくもなく、神はすべてを照覧し給い、一切のものがその功罪によって、まさにそうなるべく予定せられた如くなるようにと、その御[21]掟に従って神慮を用い給うのだから、ぼくがクリセイデさんを断念しなければならないことを、神は常に予見して居給うたのだろうってことなんだ。

だけどぼくは、ああ、如何なる人の言説を信ずべきだろう？だって、運命の予定を論理的に立証するすぐれた学者が多数存在すると同時に、[九七〇]ある人たちは事象の必然性を否定して、意志の自由が各人に与えられていると説くのだ。ああ、悲しいかな、古の学者の説くや巧妙、何びとの説に適従すべきか、ぼくには分らないのだ。志ある人たちの曰く、神がすべてを予見し給い、しかも神の誤り給うこと絶対になしとせば、然らずと断定した人が居たにせよ、かくあるべしと神の予見し給うたことは必然的に起るのだと。だから、ぼくはこう言いたいんだ、つまり、もし神が太初から、われわれの行為のみならず、思想をも予見し給うたとするならば、[九八〇]これらの学者の言うように、われわれには意志の自由というも

のが全然ないことになるということなんだ、だって、誤り給うことなき神が全智を以て予見し給うたところ以外の思想乃至行為はあり得ないじゃないか、なぜなら、もし神の予見から逸脱するような変異があり得るとすれば、起るべき事柄に対する神の予見というものは存在しないことになって、それはむしろ不確実な一見解たるにとどまり、確固たる予見ではなくなってしまうからだ。信頼すべからざる臆測しか為し得ないわれわれ人間以上の完全明徹な叡智を、神が持ち給わないと断ずるが如きは、たしかに馬鹿げた考だと言わねばならないだろう。[九九〇] 神の誤り給うことあるべきをこのように推量することは、神に対する邪悪な忌むべき行為だと言うべきだろう。脳天まで高く奇麗に剃り上げた人たちの内にも、こういう見解を持ってる人が居るんだ。彼等の言説たるやまさにこうなんだ、つまり、神がある事柄の生起を予見し給うが故にその事柄が起るのではなくて、その事柄が起るべきが故に神は叡智を以てそれを予見し給うのだというにあるんだ。[一〇〇〇] かくて、ここにこの必然性は所在を変えて、反対の側に移ることになるのだ、なぜなら、予見せられる事柄が確実に起るということが必然的なのではなくて、彼等の言うところによれば、生起する事柄はすべて確実に予見せられるということが、必然的なのだからだ。

どちらがどちらの原因なのかということ、つまり、神の予見が起るべき事柄の必然性の確実な原因であるのか、それとも、起るべき事柄の必然性が予見の確実な原因であるのかということ、それを究明することに、ぼくは懸命なのだ。[一〇一〇] 今ぼくは、そのいずれが原因なりやを立証することに努力してみる積りはないんだが、こう確信するんだ、つまり、確実に予知される事柄は必然的に起らねばならないということなんだ、[一〇二〇] もっとも、だからといって、事柄は正邪何れにもあれ、予見がその事柄の生起を必然的ならしめるとは思えないんだがね。

なぜなら、ある人が向うの席に腰かけている場合に、その人が腰かけていると推量する君の判断が確実に真実だということは必然的なんだからね。さて更に他方、逆の側もまたまさに正しいんだ、聞いてくれ給え、時間はかけないから。[一〇三〇] ねえ、いいかい、その人は実際腰かけてるんだから、腰かけているという君の判断が真実であるならば、その人は必然的に腰かけていなければならなくなる、こう言いたいんだ、ぼくは。かくて、必然性は両者の側に存在することになるんだ、だって、腰かけている人の側には腰かけているという必然性がたしかに存在するんだし、君の側には判断の真実という必然性が存在するんだからね。こういうわけで、全くのところ、両者の側に必然性が存在しなければならないことになるんだ。だが、君はこういうかも知れない、その人が腰かけているという君の判断が真実なるが故にその人が腰かけているのではなくて、むしろ、その人が前からそこに腰かけているが故に君の判断が真実なんだって風にね。[一〇四〇] それに対して、ぼくはこう言いたいんだ、つまり、君の

判断の真実性の根源は、その人が腰かけているということにあるかも知れないが、しかも必然性はその人と君との間で相互作用的なんだってことなんだよ。

かくて疑もなく、神の摂理と将来起るべき事柄について、同様に推論することができるように、ぼくには思えるんだ。そして、そと推論によって、こういうことが充分分る筈だよ、つまり、この地上で起る事柄はすべて必然的に[一〇五]起るんだってことがね。だって、仮に、事柄が確実に起るが故にそれは確実に予見せられるのであって、予見せられるが故に事柄が起るのではないとしてもだね、起るべき事柄が真に予見せられるということが必然的であるのか、予見せられる事柄が必然的に起るのか、そのいずれかなんだからね。そして、このことは確かに、われわれの意志の自由を全滅せしめるのに、まさに充分なんだ。

[一〇六]ともあれ、一時的な事柄の生起が永遠の神の予見の原因だと言うが如きは、恥ずべきことだ。起るべき事柄が神の予見のを生ぜしめるのだとなすが如きは、実に誤った見解だよ。もしぼくが、そのような考え方を採るとするならば、事柄が起るべきが故に神はその起るべき事柄を予知し給うに外ならないのだと考える以外に、どう考えることが出来るだろう？かくては、嘗て生起した一切の事柄が、誤ることなくすべてを予知し給うなる神の[一〇七]予見の原因だと考え得ることになるじゃないか。更にぼくは、こう附け加えたいんだ、つまり、ある事柄が存在することをぼくが知っている時に、それがまさに必然的に存在しなければならないように、起るべき事柄をぼくが知る時には、それは必然的に起らねばならないのだから、予知せられる事柄の生起は、絶対に避けることが出来ないんだってことなんだ。」

それから彼はこう叫びました。

「[一〇八]これら一切のことについて、その真実を知り給うなる、王座にいます全能のジョーヴよ、ぼくの悲しみを憐んで、すぐさま、ぼくを死なせて下さい、それとも、クリセイデさんとぼくを苦しみから救って下さい！」

彼がこのように苦悶のうちに、このように自問自答している時に、パンダラスがはいって来て、こう言いました、

「ああ、王座にいます全能の神よ！ですか。なんとまあ、利巧な人のしぐさじゃありませんね、このご様子は。ねえ、トゥローイラスさん、どうなさるお積りなんですか？　ご自分をご自分の敵にしたいってお気持なんですか？　[一〇九]ねえ、クリセイデはまだ行ってしまったわけじゃありませんよ。恐怖のためにご自分をやっつけてしまおうとなさるなんて、どうして、そんなことがなさりたいのですか、まるで死人のような眼つ

きですよ。以前には何年間もクリセイデなしでお過しになって、結構お気持がよさそうだったじゃありませんか。あなたは外の誰にでもなく、ただあれの為にお生れになったんですか？　ただ、あれを喜ばせる為にだけ、自然があなたを造ったんでしょうかね。よして下さいよ、そんなお考えは。お苦しい今の場合、こうお考えになっていただきたいですね、つまり、恋の喜びなんてものは、賽ころの目の出たとこ勝負で、来たり逃げたりするものだって風にね。[一一〇]だけど、ぼくの一番不思議に感じるのは、クリセイデのギリシャ行きが、果たしてどうなるかってことも、あれ自身にこの計画を妨害することが出来るかってことも、まだご存じないのに、どうして今からそんなに悲観なさるんだろうってことなんですよ。あれの才智をすっかりお試しになったことも、まだないじゃありませんか。いよいよ首を刎ねられる段階になって、はじめて首を突き出す、土壇場でやっと悲鳴を上げる、それで結構おそくはありませんよ。

だから、ぼくの申し上げることをよくお聞き下さい。ぼくは、あなたとお打ち合わせしたように、長時間膝をつき合わせてクリセイデと話し合ったんですが、[一一一]その結果、ますますこう思えて来るんですよ、つまり、ぼくの推測にして誤りなければ、あなたの恐れてらっしゃるあの件を妨げ得る何等かの方法を、あれが心中ひそかに抱いてるんだって風にね。ですから、ご忠告申し上げたいんですが、夜になればあれの所にお出でになって、この件の極まりをおつけになることですよ。そうすれば、聖なるジューノーがその大きな御力によって、われわれに恵みを垂れて下さることでしょうよ。クリセイデを行かせるものか、絶対に、ぼくの心はこう叫んでますよ。だから暫くお心をお落ち着けになって、[一一二]所期の目的を堅持なさることですね、それが一番ですよ。」

「全く君の言うとおりだ、そうすることにするよ、ぼくは。」トゥローイラスはこう答えて、はげしく溜息をつき、言いたいことを更につけ加えて述べました。いよいよ出かける時刻になるや、彼は何時ものとおり、誰一人伴わないで、ひそかにクリセイデのもとに赴きました。その面会の様子はすぐ続いてお話し致しましょう。

最初顔を合わせるや、全くのところ、二人の心は悲しみに打ちひしがれて、[一一三]どちらも相手に挨拶することができず、ただ互に腕に抱き合って接吻するばかりでありました。二人と内ではいくらか悲しみ方の少いトゥローイラスさえ、自分が今どこに居るのかも分らないような有様で、悲しみと啜り泣きのために、今申しましたように、一言すら発し得ません。二人の流す悲しみの涙は、普通の涙とはちがって、苦悩のあまり、蘆薈か胆汁のように苦いものでした。そのように苦い涙は、悲しみに沈む[23]ミルラさえ、その樹皮から流さなかったようです。二人のはげしい苦

悩を憐もうとしない程、心の冷たい人はこの世にいないことでしょう。[一一四〇]

けれども、疲れ果てた悲しい二つの心が、在るべき場所に戻り、長時間歎いたために、苦悩もやや和らぎ、涙の泉が涸れはじめ、胸の高まりも鎮まった時、泣き叫んだために、すっかり嗄れてしまった杜切れ声で、クリセイデはトゥローイラスに向って言いました、

「ああ、ジョーヴの神様、死にそうです、どうぞお恵みをお垂れ下さい！　トゥローイラス様、お助け下さい！」[一一五〇]

そう言いながら、顔をトゥローライスの胸に当てて、もはや物も言えません、そと言葉を発すると同時に、悲しみに満ちた心が、その在るべき場所からまさに離れようとしていたのです。嘗ては見るから爽かで、この上もなく美しかった顔色を真青にして、彼女は横たわっていたのでした。

クリセイデを見つめていたトゥローライスは、彼女の名を呼びましたが、死んだように横たわったまま、返事もしません、手足は冷たくて、眼はうわずっています。悲しさのあまり、彼はその冷たい唇に幾度も接吻する外には、為すべき術とて知らなかったのでした。[一一六〇] 彼の悲しみを誰一人として知ってくれなかったのです。彼は立ち上って、彼女のからだを長々とまっすぐに横たえましたが、からだの何処にも生命の兆しを見つけ得ないように思われ、ああ、ああ、と何度も歎声を上げるばかりでした。言葉もなく、彼女が横たわっているのを眺めながら、彼は物悲しい声で、いとも悄然と、クリセイデはこの世を去ってしまったのだと呟くのでした。[一一七〇] かくて彼は、彼女のこの有様を最時間歎き悲しみ、手を握りしめ、言わずにはいられないことを口走り、彼女の胸の上に塩辛らい涙の雨を注いだのち、涙をすっかり拭って、彼女の魂の為に、悲しげに祈りながら言うのでした。

「ああ、御座にいます神よ、わたくしにもお憐みをおかけ下さい、わたくしはすぐ彼女の後を追う積りですから。」

彼の見るところでは、クリセイデはどうやら冷たくなって、知覚を失っている様子でした、呼吸が全然感じられなかったからです。そしてこのことは、彼女がこの世から去った確かな証拠だと、彼には思われたのでした。[一一八〇] ほかに採るべき方法もないことを知るや、彼はクリセイデの手足を、棺台に乗せられる人の手足のように揃えました。それから直ぐさま、厳然たる悲壮な気持で、刀の鞘を払ったのでした、恋の神も無慈悲な運命の女神も、この上自分がこの世に生を保つことを望まない以上、自分の魂がクリセイデの魂の後を追ってマイノス[24]の命ずる所に行けるよう、死の苦痛は如何にはげしくても、自らの命を絶ちたい、こう思ってのことでした。[一一九〇] かくて彼ははげしい侮蔑の念に満ち溢れながら言いまし

た、

「ああ、残忍なジョーヴよ、敵意をいだく運命の女神よ、あなたたちは、ぼくを欺いて、クリセイデさんを殺してしまったんです、結局そういうことなんです。だけど、ぼくに対してこれ以上残酷なことをすることは、あなたたちには出来ないんだから、あなたたちの力も、様々な仕事も、高の知れたものだ！　こんな卑怯な真似をしたって、ぼくを打ち負かすことは絶対にできないんだ。あの人が死んだって、ぼくをあの人から引き離すことはできないんだ、だって、あなたたちが、このようにあの人の命を奪った以上、ぼくはこの世を捨てて、天国にだって地獄にだって、あの人の魂の後を追っかけて行く積りなんだから。[二二〇]トゥローイラスは臆病風を吹かせて、愛人と一緒に死ねないんだ、こんなことを世間の恋人に言わせない積りだ、だって、ぼくはあの人のお附合をしようと断然決心しているんだから。だけど、ぼくたちがこの世で一緒に住むことを許して下さらない以上、せめて、ぼくたちの魂が一緒に居ることを許していただきたい。ぼくが悲しみのうちに去って行くトゥロイの町よ、プライアム王よ、兄弟たちよ、母上よ、さようなら、行きますよ、ぼくは。アトゥロポス[25]の女神よ、ぼくの柩を用意して下さい。」

全く死ぬ覚悟を極めて、刀を胸に当てながら、更に、「[二二〇]クリセイデさん、愛するあなた、いま、ぼくの魂を迎えて下さい」と言おうとしました。けれども、神の思召しによって、この言葉を聞くや、クリセイデは失神から醒め、溜息をつきながら、「トゥローイラス様」と叫びました。「愛するクリセイデさん、まだ生きてたんですか。」こう答えて、彼は刀を滑り落しました。「ええ、ヴィーナス様のお蔭で！」こう言うと同時に、クリセイデははげしく溜息をつきましたが、トゥローイラスは全力を尽くして彼女の心を引き立てようとしました。そして、彼女を両腕に抱いて何度も接吻し、[二二〇]一意専心彼女を励まそうとするのでした。その結果、宙をさまよい続けていたクリセイデの魂は、再び彼女の悲しい胸に舞い戻って来ました。けれどもやがて、ちらりと脇を見るや否や、彼女は忽ら抜身のままで置いてある刀を見つけ、恐しさのあまり悲鳴を上げて、刀を抜いたわけを彼に尋ねました。トゥローイラスはすぐさまその訳を話し、その刀で自分の命を絶とうとした次第を語りました。それを聞いて、クリセイデは彼をじっと見つめ、[二二〇]彼を腕にしっかり抱きしめて言いました、

「あらまあ、ほんとうに、なんてことを！　ああ、もう少しのところで、二人とも死んでしまうところだったのですわ！　わたくしが運よく口を利かなかったら、すぐ死んでおしまいになるところだったのじゃございません、あなた？」

「そうだ、たしかに。」

ジェフリ・チョーサー作　トゥローイラスとクリセイデ

「ああ、わたしをお造りになった神様にかけて申しますわ、あなたがお亡くなりになった後、わたくし暫くの間でも生きて居ようとは思わなかっただろうと存じますわ、太陽が燦然と輝きわたるかぎりの地域の女王にしてやろうって言われても。ここにあるこの刀で自刃しただろうと思いますわ。だけど、よしましょうよ、だって、飽きたんですもの、こんなお話には。さあ立ち上って、すぐ寝室に参りましょうよ。そして、わたしたちの不幸について、お話しすることに致しましょう、だって、程なく夜が明けるんだってことがよく分るんですもの、そこで燃えている灯火の様子で。」

二人は抱き合ってベッドに横たわりましたが、以前に重ねた夜々とは、まるで様子がちがっています、すべての喜びを失ってしまった二人のこととて、現在の不幸を歎き悲しみながら、いとも切なげに、互に顔を見つめていましたが、そのうち漸く、悲しみに沈んだクリセイデは、トゥローイラスに向って言いました、

「ねえ、あなた、不幸を歎いてばかりいて、打開の道を求めないのは、全く馬鹿げたことだってこと、また、苦しみを増すばかりだってことは、あなたもよくご存じでいらっしゃいますわね。わたしたちの現在の不幸から逃れる方法を見つけるために、今ここで一緒になったんじゃございませんか、ですから、早速そのご相談を始めることに致しましょうよ。百もご承知のとおり、わたくし一介の女性に過ぎないのですけれど、そのわたくしがいま急に思いついたままを、ほとぼりの冷めないうちに申上げますわ。わたくしにはこう思われますのよ、あなたもわたくしも、今の半分も悲しむ理由はございませんわ、だって、苦境を切り開いて今の憂鬱を消してしまう術なら、どっさりございますもの。わたしたちの今の不幸の原因って言えば、たしかに、わたしたちが別れなければならないってことだけだと存じますわ、色々考えてみましても、外に悪いことってないのですもの。そしてその対策って言えば、またすぐお逢いできるような段取りを考えるってことしか無いのじゃございません？　ねえ、あなた、そういうことになるんだと存じますわ。あちらに行っても、また直ぐ立派に帰って来てご覧に入れるってこと、そのことには絶対に自信がございますわ、必ず一、二週間のうちに、こちらに帰って参ります。それを首尾よく実現する方法なら、いくらでも申上げますわ、かいつまんで。失われた時間は取り返しのつかないものなのですから、くどくどしくは申上げないことにします、一等いいのじゃないだろうかって思われる方法の結論を、すぐ申上げることに致しますわ。お心をお乱しするようなことを申しましても、お許し下さいませね、後生ですから。だって、ほんとうに、一番いい方法だと思って申上げるのですもの。きっぱりお断りしておきますけれど、わたくしがいま申上げること

とは、わたしたちを救う一等いい方法は、こうすれば見つかりますよって、申上げるだけのことなのですから、どうぞ外の意味にお取り下さらないように。だって、こうしろって、あなたの仰有ることなら、わたくし本当に何だって致しますわ、嫌だの何だのって、申上げる余地はございませんもの。

ねえ、お聞き下さいませ、あなたもご存じのとおり、わたくしが向うに参りますことは、会議ではっきり承認されたことで、わたくしの判断では、今更何とも逆らいようがございませんわ。いくら考えてみましても、一三〇〇それを中止させるってことは、出来そうにもございません。ですから、その点は一応度外視して、もっともいい方法はないものか、工夫してみることに致しましょうよ。全くのところ、お別れしなければならないってことのために、わたしたちは不安を覚えたり、ひどく苦しんだりするわけなんですけれど、恋をするほどの者なら、喜びが得たければ、時には悲しみも味わわなければならないのですわ。

それに、わたくしがトゥロイの町を離れるって申しましても、朝のうちの半分くらいの時間で帰って来られる距離じゃございませんか、ですから、わたくしたち、それほど悲しまなくてもいいのですわ。ねえ、一三一〇あなた、わたくし何も篭の鳥になってしまうってわけじゃございませんから、ご存じのように、今は休戦中でもございますので、わたくしの様子は、毎日詳しくお知らせ申上げますわ。そして、休戦期間の終らないうちに、こちらに戻って参りますわ。そうすれば、アンティーナー様もわたくしも、無事だってことになりますわ。ですから、どうぞご安心下さいましな。こうお考え下さいませ、クリセイデは行ってしまった、だけど何でもないんだ、直ぐ、また、さっさと帰って来るんだって、そういう風にね。何時だろうって仰有いますの？直ぐですわ、きっと。一三二〇十日以内にって、そう断言致しますわ。そうすれば、何時までもご一緒に暮らせることになるのですもの、わたしたち初めて喜び合えますわ、世間の人には分らないくらい幸福に浸って。

わたくし何度も考えることなんですけれど、わたしたちの現在の状態では、わたしたちの秘密の計画を洩らさないために、お互に二週間は口を利かないってこと、それにまた、あなたのお歩きになってるところだの、お馬に召してらっしゃるところだのを、わたくしが見ないようにするってこと、そうするのが一等いいんだって気が致しますわ。十日間さえ我慢できないって仰有いますの？　現在のような状態に追い込まれて、わたくしの体面の為だとあっても？　一三三〇だとすれば、随分ご辛抱が足りませんわ。

こういうこともあなたご存じでいらっしゃいますわね、この町には、父だけは別ですけれど、わたくしの親戚の者たち全部が住んでいるんだ

ジェフリ・チョーサー作　トゥローイラスとクリセイデ

ってこと、その外、わたくしの持物全部があるんだってこと、特に、愛するあなたって方が居らっしゃるんだってことですわ。あなたのお顔を見ることを断念するなんてこと、わたくし嫌ですわ、この広い世界全部をそっくりやろうって言われたって。正真正銘、これこそわたしの本当の気持ですわ。父がわたくしにこんなに会いたがるのは、父のために、父の恥ずかしい行為のために、一三四〇町の人たちがわたくしを経蔑しやしないかって、心配だからなんですわ、そのほかに理由があるってお思いになりまして？　わたくしの今の生活振りが、父には全然分らないのですわ、だって、トゥロイの町でわたくしがどんなに楽しく暮らして居るかってことを父が知ってくれれば、わたくしがあちらに行くってことを、二人してこんなに気に病むことにならないで済むのですもの。

ご存じのように、講和論が毎日ますます盛んになって参りますわね。王妃のヘレン様を先方に返すことになるでしょうし、ギリシャの側でも、わたしたちを元のいい状態に戻してくれるだろうと思いますわ。ですから、一三五〇各方面で講和が意図されてるってこと以外には、わたしたちを慰めてくれる材料はないのですけれど、それだけでも楽なお気持でお過しになれる筈ですわ。なぜって、あなた、平和になれば、自然人々がお互に往き来することになって参りますし、蜜蜂が巣から飛び立つように、彩しい人の群が徒歩や馬で、あちらこちらに出かける、そういうことに早速なって参りますし、また、誰も皆一々断らないで、好きな所に住む自由が持てることになるのですもの。よし講和が成立しないで一三六〇平和が来なくても、わたくし、こちらに帰って来なければなりませんわ、だって、何処に行けばいいのだか分りませんし、絶えずあちらの兵隊さんたちの間で、おずおず暮らすのも嫌ですもの。ですから、全くのところ、何をあなたがご心配遊ばすのだか、わたくし全然分りませんわ。

いま申上げた方法が、どれもお気に召さないようなら、また別の方法もございますのよ。よくご存じのように、父は年を取ってるんですけれど、老人ってみんな、とても慾が深いものですわ。一三七〇そこで、わたくしたった今、網なしで父を捕える方法を思い付きましたのよ、どうぞ、お聞き下さいましな。ねえ、トゥローイラス様、狼にも羊にも傷を負わせないってことは、困難だって申しますわね、つまり、人しばしば、一部を犠牲にして、残りの部分を救わなければならないんだって意味なんですわ。だって、慾でかたまった人の心には、何時だって、お金を滲み込ませることが出来るのですもの。どういう意味でこのようなことを申上げるのでしょう、それをお話し致しますわ。

一三八〇この町に在るわたくしの持物を父の所に運んで、父にこう申しますわ、これは安全に保管してもらう為に、父の友人の一、二から送られて来た物で、その友達は、この町がこのように危険に曝されている間に、更に後から大急ぎで送るから宜しくって熱心に父に頼んでいる、そして、

その品物は莫大な量に上る筈だ、だけど発覚しては困るので、わたくし以外の人がそれを送るわけにはいかない、こういう風に申しますわ。一三九〇そしてまた、わたくしには宮廷関係の各方面にこれこれの友達がある、平和が恢復した暁には、その人たちがプライアム王のご不興を解いて下さって、王様のご寵愛が受けられるように、父の為に心配して下さる筈だ、こういう風にも父に説明致しますわ。こういう工合に、あれだのこれだので、言葉巧みに父を恍惚とさせて、魂天に遊ぶって風に、夢心地にしてご覧に入れますわ。だって、アポロも、父の専門の学理も、星占いも、全然役に立たないで、ただもう金銭慾に父の心が眩んでしまうってわけで、一四〇〇わたくし、思いどおりに凫をつけることが出来そうなのです もの。わたくしが嘘をついてるのじゃないだろうかってわけで、父が占術で以って、嘘だって証拠を何か挙げようとすれば、わたくし是非ともその邪魔をして、父が占ってる間に、その袖を引っ張ってやりますわ。そして、こう言って父を納得させることに致しますわ、神様のお言葉って曖昧なもので、神様なんて、一つの真実に対して、二十の嘘を仰有るものなのだから、神様ってものを父は充分理解していないのだ、それにまた、神様ってものは、元来恐怖心がつくり出したものじゃないだろうか、父が恐れをなしてデルフィから逃げて帰った時も、臆病な心から一四一〇神様のお言葉を間違って取ったのだ、こういう風に言ってやることに致しますわ。もしわたくしがすぐ様父の心を変えて、一日二日のうちに計画を実現することが出来なければ、是非ともあなたのお手で殺していただくことに致しますわ。」

全くのところ、書物に書かれているように、クリセイデの言葉はすべて善意に出たもので、トゥローイラスに対する彼女の気持は誠実と親切に溢れており、彼女の言葉はまさに本心どおりなのでした。そして、いよいよ出発することになった時、彼女は悲しみのために、殆んど命が絶えそうになりましたが、一四二〇永久に心を変えまいと決意したのでした、彼女の行動を知っている作者たちは、このように述べています。

トゥローイラスは心を緊張させ、耳を澄まして、説き去り説き来たるクリセイデの言葉の一部始終を聞き、全く同感だとは思ったのですが、彼女を行かせることを考えると、不安が増して来るのでした。けれどもそのうち漸く、われとわが心を彼女を信頼する気持にさせて、彼女を行かせるのが一番いいのだと考えました。そこで、一四三〇はげしい苦悩の嵐も希望で鎮められ、二人の間には喜びに溢れた甘い恋のしぐさが始まりました。太陽が輝くとき緑の葉かげで小鳥がその囀りに心を躍らせるように、語り合う二人の言葉は彼等の心を楽しくし、晴々した気持にさせるのでした。けれども、クリセイデが去ってしまうのだという一事は、どうしてもトゥローイラスの心から離れません。そこで彼は、約束を誠実に守ってもらいたいと、幾度となく切々とクリセイデに懇願して言いました、

ジェフリ・チョーサー作　トゥローイラスとクリセイデ

ジェフリ・チョーサー作　トゥローイラスとクリセイデ

「もしあなたが約束の日にトゥロイに帰って来ないってような冷淡なことをするなら、[一四四〇] きっとぼくは健康も名誉も喜びも無くしてしまうでしょうよ、だって、ぼくは、あなたがその期日に遅れるなら、必ず死のうって覚悟でいるんですよ、朝になれば太陽が昇るように間違なくね。神よ、是非ともぼくを、悲しみに沈んだみじめなぼくを、このはげしい悲しみから救って、安息へとお導き下さい！　だけどクリセイデさん、死を意に介するようなぼくじゃありませんが、そんな悲惨な目に遭わせないで、この町に居ていただきたいですね、[一四五〇] なぜって、本当のことを言えば、ねえ、クリセイデさん、あなたが提案した色々な計画は、どれもこれも失敗に終りそうな気がするんですよ、だって、熊と熊使いは、別々のことを考えているんだって諺があるじゃありませんか。あなたのお父さんは利巧な方なんだ、賢者には駈け比べで勝てても、智慧比べでは勝てないって言いますよ、たしかに跛（びっこ）の前で気付かれないように跛を引くのはむずかしいことだ、だって、跛自身が同じような歩き方をするんですからね。策略にかけてはアーガラス[四]のような眼をお持ちになってるお父さんのことだ、財産を無くしてしまわれたにしろ、[一四六〇] 策略の智慧は昔のままなんだから、あなたがお父さんを瞞そうだの、見せかけの芸当をやろうだのなんて、女の身として出来ない相談ですよ、それが心配なんだ、ぼくは。

平和が果たして来るものだかどうだが、ぼくには分らないんだが、平和になっても、ならなくても、また本気にしろ冗談にしろ、一旦ギリシャ側に投じて名を汚した以上、カルカスさんも二度とこちらに帰って来る勇気はあるまいと思いますね、恥ずかしくって。だから、あなたのような遣り方に期待をかけるのは、[一四七〇] どうも酔狂としか考えられないんですよ、ぼくは。こういうことも考えられないですか、つまり、お父さんがあなたを上手に説き伏せて、結婚させてしまうってことなんだ、お説教の上手なお父さんのことだから、ギリシャ人の誰かを褒めそやして、辨舌爽かにあなたをうっとりさせてしまうとか、無理矢理にお説教どおりにさせてしまうとか、そんなことがあるかも知れませんよ。そして、あなたに同情してもらえないトゥローイラスは不理不尽にも、誠実な心を懐いたまま死んでしまうでしょうよ。

加うるにだ、これはわれわれ全部を侮辱することになるんだが、お父さんはこう仰有るかも知れませんよ、この町は既に破滅したようなものだ、ギリシャ軍がそう言明してるんだから、君たちが殺されて城壁が崩れ落ちるまで、[一四八〇] 包囲は絶対に解かれないだろうって、こんなことをね。こんな嚇し文句にひっかかるかも知れませんよ、あなたは。だから、ぼくは心配なんですよ、あなたが向うに残る気持になるんじゃないかって。それにまた、ギリシャ軍の中では、勇気に満ち溢れた元気な騎士たちが、沢山あなたの目にうつるかも知れない、そして、その一人々々

が、あなたの気に入らんものと、心と智慧と力を傾けて、勤勉これ努める結果、われわれ単純なトゥロイ人の野暮ったさが、あなたの鼻について来るかも知れませんよ、[一四九〇]ぼくを憐んで下さる気持、貞淑な心持から、済まないことをしたって思わない限りはね。

こんなことを考えると、ぼくはぞっとして、胸から魂をもぎ取られてしまいそうな気がするんですよ。あなたが行ってしまうってことになれば、ぼくはきっと楽観しては居られないだろうと思うんだ、だって、ぼくたちはお父さんの策略にかかって、破滅してしまうだろうからね。考えて下さいよ、あなたが行ってしまえば、前にも言ったように、ぼくは死んでしまうより仕方がないんだ。だからぼくは、謙虚な、誠実な、そして、悲惨な気持で、何度も[一五〇〇]繰り返して、あなたの同情をお願いするんですよ、ぼくのうずくような激しい苦しみに同情して、少しはぼくの言うようにして下さいよ。二人だけで、こっそり逃げようじゃありませんか。考えてご覧なさい、何にを採ろうと自由なのに、偶然性を求めて確実性を失うなんて、馬鹿げてますよ。それはこういう意味なんです、つまりぼくたち二人は夜の明けないうちに、充分逃げて一緒になれるんだから、あなたがお父さんの所に行く場合の話なんだが、そんなことをして、帰って[一五一〇]来るかどうか試してみようなんて、智慧が無さ過ぎはしないかってことなんだ。だから、ぼくは言うんですよ、確実な方法を危険な方法の犠牲に供するなんてことは、愚の骨頂だってね。卑近な話になるんだが、財産のことなら、死ぬまで立派な楽しい生活が出来るだけの物は、ぼくたち二人とも持って行けるんだから、その点は全く心配いりませんよ。あなたがそれ以外のどんな方法を思い付くことが出来るにしろ、実際のところ、それには全然賛成できないんだ、ぼくは。生活が貧しかないかってことなら、心配いりませんよ、絶対に。なぜって、ぼくには到る所に親戚や友達があるんだから、着のみ着のままで行ったって、お金や品物に事欠くことはないんだ、その土地で暮らしている間は、敬意を払ってもらえますよ。さあ、すぐ行きましょうよ、だって、あなたさえ同意して下さるなら、それが一番いい方法だと思うんだ。」[一五二〇]

クリセイデは溜息をつきながら答えました、

「ねえ、あなた、わたしたちは確かに、あなたの仰有るとおり、こっそり逃げて、そんなつまらない新しい生活をはじめることが出来るでしょうけれど、後になって大変後悔するだろうと思いますわ。ああ、この大切な瀬戸際で、神様がわたくしをお助け下さいますように！ だって、あなた、訳もなく、やたらにご心配なさるのですもの。父やほかの人を大切にする為にだとか、恐れるからだとか、また、地位だの、安楽だの、結婚だのの為にだとかで、あなたを、わたくしのトゥローイラス様を、わたくしの騎士様を、わたくしがお裏切りするようなことがあれば、ま[一五三〇]

さにその日にサタンの娘のジューノーがその力を振って、地獄の底のスティックス[28]に、アサマス[29]のように狂乱した状態で、わたくしを永遠に住まわせますように！　天にいますすべての神々、すべての女神たちにかけて、このことをあなたにお誓い致しますわ。また、あらゆるニンフたちや地獄の神々にかけて、荒野の半神半人である大小のサター[30]やフォーンにかけてお誓い致しますわ。わたくしの心が変るようなことがあれば、アトゥロポス[31]の女神がわたくしの命の緒をお絶ち切りになりますように！　トゥローイラス様、どうぞわたくしをお信じ下さいませ。清らかな矢のようにトゥロイの町を貫いて、絶えず海に注ぐレモイスの川よ、今わたしの言うことの証人になっておくれ、気高いわたしの愛人トゥローイラス様を、わたしがお欺きするような日には、お前が源に向って逆流して、わたしの身も心も地獄の底に沈んでしまいますように！　この言葉の証人になっておくれ。

だけど、今あなたの仰有ったお言葉、お友達をみんな捨てて行っておしまいになるってこと、女の為にそのようなことをなさるのは、絶対におよしになって下さいませ、殊に、トゥロイは現在是非ともお力添えを必要としているのですもの。それにまた、こういうことにもお心をお留め下さいませ、それは、もしこのことが人に知れれば、わたしの命もあなたのご名誉も、危険に曝されるだろうってことですわ。神様がわたしたちを不幸からお守り下さいますように！　怒りの後には何時もきまって喜びが来るって申しますとおり、今後平和になった時、面目がなくて帰れないってことにおなりになって、きっとお悲しみになると存じますわ。ご名誉を危険にお曝しにならないうちに、このような計画にそそくさと熱中なさることはおよしになって下さいませ、だって、性急な人には不幸が附き物なんですもの。それにまた、世間の人たちがなんて言うとお思いになりまして？　容易に想像がつきますわ。あなたのご行動が恋愛のためじゃなくって、肉体的な慾望と臆病な恐怖心に駆り立てられた結果だって、きっとこのように断定するだろうと思いますわ。そのようなことになれば、ねえ、あなた、赫々たるご名誉も、きっと地に墜ちてしまいますわ。それに、わたくしがこのように、あなたとご一緒に逃げたってことになれば、花のようにかぐわしい名声を、わたくしがどのように傷つけるかってこと、その名声がどのように汚されるかってことも、お考え下さいまし。たとえ、わたくしがこの世の終りまで生き永らえるとしましても、名誉を恢復することは出来ないだろうと存じますわ。このようにして、わたくしは完全に葬り去られてしまって、自分の犯した罪を歎くことでございましょう。

ですから、逸り立つお心を理性の力でお鎮め下さいませ。忍耐強き者は打勝つべしだの、己の好むところを得んと欲する者は、その好むとこ

ろを捨てざるべからずだのって申しますわ。已むを得ない現在の事情にご忍従下さいませ。運命を意に介さざる者は、常に運命を支配すべし、運命ただ弱き者のみを屈服せしむものなりってことをお考え下さいませ。ねえ、[一五九〇]あなた、どうぞ固くお信じ下さいまし、フィーバスの妹の、美しく輝くル[32]ーサイナが白羊宮を出て、獅子宮を通り過ぎるまでに、わたくし、きっと帰って参りますわ、つまり、――天の女王ジューノー様がお護り下さいますように！――、十日目には必らずあなたにお逢い致しますわ、死なない限りは間違なく。」

「その言葉が本当なら、十日目まで辛抱しますよ、やむを得ないってことが分ったから。だけど出来ることなら、二人してこっそり逃げましょうよ、ぜひ。だって、ぼくの気持は依然として変らないんだ、やはり二人で静かに暮らすのが、一番いいように思えるんですよ。」

クリセイデが答えますに、

「ああ、神様、なんて人生なんでしょう　ああ、あなた、そのようなことを仰有って、わたくし悔しくって、死んでしまいそうですわ。信じては下さらないんだってことが、今よく分りましたわ、だって、お言葉から、それがはっきり分るのですもの。輝くシ[33]ンシアの愛にかけて、わたくしを憐れと思召し、このように訳もなくわたくしをお疑いになるのは、およし下さいませ、[一六〇]心変り致しませんって、そうお誓い申上げたじゃございませんか。一つの機会を得るために他の機会を失うってことも、時には賢明なんだってことを、よくお考え下さいまし。わたしたちが一日、二日お別れしたからって、わたくしがあなたから消えてなくなった訳のものでもございませんわ。そのような取りとめもないお考えは、すっかりお捨て下さいませ、そして、わたくしをお信じ遊ばして、お悲しみをお忘れ下さいませ、でなければ、お誓い致しますけれど、わたくし朝まで生きてはいないことに致しますわ。わたくしがどんなに心を痛めているかってこと、それがお分りいただけますなら、逃げるってことをおよし下さる筈ですわ、だって、誰よりもお愛しているあなたは、目の前でお歎き遊ばす、自分はギリシャ軍のもとへ行かなくちゃならないって訳で、[一六二〇]わたくし本当に心の中で泣いていますのよ。

帰って来ようにも法がつかないってわけなら、わたくし今ここで死んでしまいますわ。でもわたくし、お約束申上げた日に戻って来る方法が考え出せないほど馬鹿じゃございませんわ、絶対に。離れて行こうって者を引き留めることは、誰にだって出来るものじゃございませんもの、どんな妙案奇策を弄したって、父に出来っこございませんわ。[一六三〇]わたくしがトゥロイを立ち去るってことは、他日きっとわたくしたちの幸福になりますわ。ですから、心からのお願いでございます、わたくしの願いに免じて、そして、わたくしの愛情と変らないご愛情から、何とかしてや

ジェフリ・チョーサー作　トゥローイラスとクリセイデ

ろうと思召すのなら、わたくしがあなたのお側を離れる前に、愉快なお元気なお顔をお見せ下さって、今にも裂けようとしているわたくしの胸を、お和げ下さいまし。

一六四〇 わたくしの心を本当に満たして下さる方、トゥローイラス様、今一つお願いがございますのよ、ほかの人は誰も愛さないで、全くあなたお一人のものであるわたくしでございます、わたくしの居ない間に、ほかの女性にお浮かれになって、わたくしをお忘れ遊ばさないように、だって、恋は常にいとしげき不安に満てるものなりって申しますように、わたくし何時も不安でならないのですもの。口にしたくもございませんけれど、万一あなたが不誠実なことを遊ばした場合、わたくしくらい裏切られる女性、わたくしほど悲歎に暮れる女性は、この世の中に一人だって居ないだろうと存じますわ、ひたすら、あなたのご誠実を信じて居るわたくしですもの。一六五〇 もしあなたのご誠実が信じられないようなら、全くのところ、わたくし死んだも同然ですわ。もっともな理由のないかぎり、後生でございます、ひどいお仕打ちを遊ばさないように。」

この言葉に対して、トゥローイラスが答えて言いますには、

「隠し立ての出来ない神よ、わたくしに喜びをお授け下さい！　はじめてその姿を見て以来、クリセイデさんを偽ること絶えてなく、今後も死ぬまで偽らない積りでいるぼくなのですから。

要するに、あなたはぼくを信用していいんだ、これ以上何も言えない、そのことはやがて実証されるでしょうよ。」

一六六〇 クリセイデは答えて言いました、

「まあ、ほんとうに有難いことですわ、あなた。聖なるヴィーナス様、当然報いをお受けになるべきトゥローイラス様に対して、わたくしが充分お報いすることが出来るような、喜ばしい状態になるまで、絶対にわたくしをお死なせにならないで下さいませ。

トゥローイラス様、あなたのご誠実なお心持はよく分りましたわ、ですからわたくし、神様のお恵みで正気を保っているかぎり、何時も人の尊敬が返って来るように行動致しますわ、だって、全くのところ、わたくしがあなたのご不幸にご同情致しましたのは、ご誠実ってことを基調にしたあなたのご徳性のためでございましたし、そもそも、最初わたくしがあなたに同情をお寄せ致しましたのもそのためですわ、王子様としてのご身分のためでもなければ、自分のくだらない喜びのためでもなく、戦争だの擬戦だのでのあなたの優れたお腕前だけのためでもございませんし、一六七〇 また、堂々たるご風采だの、ご服装だの、ご品位だの、ご財産だののためでもございませんわ。そしてまた、わたくしが外の方に対す

る以上にあなたに心を捧げ尽くしましたのは、そして[一六八〇]生涯変らない積りでいますのは、お心が優しくて男らしいご性格でいらっしゃること、粗野だの、野卑な欲望だの、およそ俗悪な一切の傾向をご軽蔑遊ばすようにお見受け致しましたこと、理性の力で欲望を抑えることがお出来になること、このような理由からでございますわ。わたくしの気持は年月がたっても変らないことでございましょうし、移り気な運命の女神も、この気持を弱めることはできないだろうと存じますわ。とにかく、十日以内に、この場所でわたくしたちが逢えて、二人とも満足が得られますよう、悲しみに沈む者をそのお力で喜ばせ給うジュピター様が、わたくしたちにお恵みをお垂れ下さいますように！　ではご機嫌よろしく、もうお出かけになる時刻ですわ。」

それから二人は長い間歎き悲しみ、何度も接吻し、しっかり抱き合いました。夜が明けそめましたので、[一六九〇]トゥローイラスは身支度を整え、はげしい死の苦痛を味わうかのように、いとも悲しげに愛人を眺めながら、彼女の懇情を懇願したのでした。トゥローイラスが悲しんだことには疑問の余地はありません、なぜならば、この悲しみに打ち沈む人のはげしい苦悩、地獄のありとあらゆる苦しみにも勝るその苦悶は、人の想像も及ばず、理解を超え、言語に絶するからです。クリセイデが町に留ることが出来ないのを知った時、[一七〇〇]彼は胸から魂をもぎ取られるような気持がしましたが、その上何も言わないで、部屋から出て行ってしまったのでした。

巻の四おわる。

注　解

巻の四

(21) この議論の大部分は、Boethius, V, Pr. 2,3 に拠っている。しかし、ボエティウスが人間の自由を認めているのに反し、この個所の議論は全く運命論的である。

(22) 運命の予定と意志の自由の問題は、チョーサーの時代に論議の的となった神学上の重要な問題であった。「尼院侍僧の話」(The Nun's Priest's Tale) の第三二四一行以下においても、チョーサーはこの問題に触れているが、そこでは運命予定説論者としてオーガスティン、ボエティウス、ブラッドウォーディン (Thomas Bradwardyne, オックスフォードの神学教授で、カンタベリの大僧正になった人、一三四九年歿) の名を挙げている。

(23) サイプラス (Cyprus) 王シニラス (Cynyras) の娘で、没薬(もつやく)の樹に姿を変えられた。

(24) ジュース (Zeus) とユローパ (Europa) の間に生れた子で、クリート島の王、死後黄泉の国で裁判官をつとめた。

(25) 運命の三女神の一人、クローソー (Clotho) は人間の生命の糸を紡ぎ、ラケシス (Lachesis) はその糸の長さをきめ、アトゥロポス (Atropos) はその糸

を断つと言われている。

(26) カルカスはトゥロイ軍からデルフィ（Delphi）に派遣せられて、トゥロイ軍敗戦の神託を受けて帰った。

(27) ギリシャ伝説における百眼の巨人

(28) 地獄の川。

(29) 古代ギリシャのボイオティア（Boeotia）地方のオーコメナス（Orchomenus）の王。妻ネフェレー（Nephele）を捨てて、イーノ（Ino）という女を愛したため、ジューノー（Juno）の怒りに触れて発狂し、地獄に墜ちて報復の女神ティシフォニ（Tisiphone）に苦しめられた。

(30) サター（Satyr）はバッカス（Bacchus）に仕える半人半獣の森の神、フォーン（Faun）は半人半獣の山林原野の神。

(31) 運命の三女神の一人、前掲注(25)参照。

(32) 月のこと。

(33) 月のこと。